ジャイナ論師ハリバドラのヨーガ観

——Y-bindu chap. I. V, YDS chap I より——

浅野玄誠

Har は九世紀に活躍した Jaina 教白衣派の学僧であるが、彼は Jaina の教理に固執することなく、Ṣaḍdarśana-samuccaya を著わし、仏教・ニヤーヤ・サーンキヤ・ヴァイシェーシカ・ジャイミニを扱い、その上『因明入正理論』に註釈を書き偏見のない思想性を実証しようと努めた。しかしそうした思想の拡張性は逆に強い思索上の個性を内抱していることは十五世紀の Vij にもみられる如くである。私は現在、Har が mokṣa への手段として重視するヨーガを、サーンキヤ・ヨーガ両学派との比較研究を通して解析することを試みている。彼のヨーガに関する独立した著作は Yogabindu, Yogadṛṣṭisamuccaya, Yogaviṃśikā, Yogaśataka の四書であるが、本論では Y-bindu chap I, V. YDS chap I をテキストとして、その思想の基盤を探ってみたい。

私はかねてより、サーンキヤ・ヨーガに二つの潮流を考えてきた。一つは多我観に基づくサーンキヤ・ヨーガであり、もう一つは絶対我観を内在させるそれである。今便宜的に大まかな分類をするならば、前者は SK と前期註釈類に、後者は YS とその註釈類ないし SK の後期註釈類（TK 以降）に認められ、SS は SK の思想を注意深く追いながらも後者の特徴を重要な課題として導入している。註釈者 Vij は特にその部分に着眼し解釈を拡大している。両者を大別する主要素は影像説（pratibimba-vāda）を持つか否かであるが、影像説のサーンキヤにおける原型は Āsuri, Vindh といったサーンキヤの古論師に求めることができる。

Har は Y-bindu 447–457 でサーンキヤ思想を批判しているが[①] その主たる対象は影像説である。Y-bindu 449 には Vindh の断片として有名な水晶に色等を添える upādhi（限定的添性）による影像説、450[②] には Āsuri 断片とみられる水にうつる月の喩説による影像説が紹介される。449 は Tarkarahasya-dīpikā, Syādvādamañjalī, Laghuvṛtti[③] にも同じ偈が引用され、450 も Laghuvṛtti[④] にみることができる。Laghuvṛtti は Saḍdarśana-samuccaya の註釈書であり、Har の時代に他学説からサーンキヤを観る場合、影像説が標準とみなされていたとすることができよう。しかも Har は、そうしたサーンキヤの影像説を紹介した後、それに反論を記している。YS は影像説を所収する側にあるから Har のヨーガ観は YS のヨーガ観とは基本的に相似しないことになる。

> 精神性（caitanya）は清浄化された一切知者の立場にある。しかし（サーンキヤの）論書[⑤]における知の否定は世俗的な思考（にすぎない）であろう。
>
> Y-bindu 456

影像説は、本来的に独存しており能作力を持たない puruṣa の、精神性（caitanya）とのかかわりを説明するために用いられているが、Vij の如き一元論あるいは有神論的方向性を持つものにとっては、こうしたサーンキヤは評価に値する。しかし Har は実証的な人間存在の根源に puruṣa を据え、人格的最高位にある一切知者の実現のための手段にヨーガ的修習を導入しているのである。

彼はすでに Y-bindu の冒頭部分で[⑥] 対象の実相（tattva）と自己

との適合性 (yogyatā) を求めるためのヨーガを説き、かかるヨーガの実習による一切智者の実現をめざしているが、この理想的人格への指向性と、先のサーンキャ・ヨーガ観両者の根底に共有される Har の思想的根拠を YDS, chap I, Har 独自のヨーガの三階梯に読みとることができる。

三階梯とは「不注意な知識を有する者にとっての不完全なダルマ・ヨーガ」たる「意志によるヨーガ」(icchāyoga)⑦、「聖典によるヨーガ」(śāstrayoga)⑧、「(聖典に) 語られざる」「一切の智慧の完成」たる「堪能なるヨーガ」(sāmarthyoga)⑨、の三種である。

Har の求めるヨーガは第三の sāmarthyoga であり、彼はこれをさらに二種に分かち Jaina 固有の単語を用いて次の如く説示する。

これ (sāmarthyoga) は二種、すなわちダルマの放棄とヨーガの放棄とによって知られる。ダルマとは減尽と抑止 (kṣāyopaśama) を本質とするものでありヨーガとは身体等の行為である。⑩

YDS 9.

前者 (ダルマの放棄) は第二の apūrvakaraṇa において真実となるであろうし āyojyakaraṇa の後で後者 (ヨーガの放棄は (真実となるであろう) とそれを知るものによって (言われた)。

YDS 10.

この二偈の対象とするところは、修行の進程にしたがって業の束縛が次第に稀薄となり、全くこれを離れ去る間を十四の段階に分ける Jaina 伝統の十四徳位 (guṇasthāna) である。

ここに言う apūrvakaraṇa は第八位、āyojyakaraṇa は第十四位にあたり、sāmarthyaga は八位から十三位に相当する。さらに八～十二位を dharmasaṃnyāsa、十三～十四位を yogasaṃnyāsa の二種に細分している。本来十四徳位もその十四位中、一～三・四～七・八～十二・十三～十四の四段階に分割するならわしがあり、Har の sāmarthyoga はその上位二段に完全に一致している。

すなわち、Har は他学説に対する寛大な許容力を示しながらも、基本的に重要な問題に関しては Jaina の伝統をその背景に据えているのである。彼にとってはヨーガは、Jaina の理想とする人格の実現であり、そのための具体的な手段としてヨーガ的実践の重要さが説かれているとみることができよう。

ABBRIVIATIONS

Har	Haribhdra	Vindh	Vindhyavāsin
SK	Sāṃkhyakārikā	Y-bindu	Yogabindu
SS	Sāṃkhyasūtra	YDS	Yogadṛṣṭisamuccaya
TK	Tattvakaumudī		

① LD Series No. 19, Ahmedabad, 1968 ; p. 118.
② ibid. p. 118.
③ Tarkarahasyadīpikā, BI p. 104; Syādvādamañjalī, ChSS IX. p. 119 ; Laghuvṛtti, ChSS XCX p. 33.
④ Laghuvrtti ChSS XCX p. 33.
⑤ LD Series No. 19, Ahmedabad, 1968 ; p. 120.
⑥ cf Y-bindu 2-30.
⑦ LD Series No. 27, Ahmedabad, 1970 ; p. 18.
⑧ cf YDS 4.
⑨ ibid. p. 19.
⑩ ibid. p. 21.
⑪ ibid. p. 21.